

委託事業実施内容報告書

平成20年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

【退職教員を対象とした日本語指導者養成】

受託団体名 特定非営利活動法人

中学・高校生の日本語支援を考える会

1 事業の趣旨・目的

教員経験者は学習支援者として即戦力があり、特に年少者の支援については学校現場を内側から知っているので現実的な学校連携をとりやすい。しかし、地域でボランティア活動することの視点やノウハウ、第二言語習得理論についての知識は不十分であるので、この養成講座でそれらについて学び、修了後は、地域の人的リソースとして活躍してもらおう。

2 企画委員会の開催について

【概要】

開催日時	開催場所	出席者	議題	会議の概要
10月5日	かながわ県民センター	長谷川朋美 宮崎幸江 山縣紀子 坂内泰子 樋口万喜子	・講座日程とシラバス ・受講生募集から開講までのスケジュール ・講座の運営方法	講座日程とシラバスの内容検討・受講生の募集方法、受講条件の確認、開講までの予定・スタッフの役割分担
1月5日	かながわ県民センター	長谷川朋美 宮崎幸江 山縣紀子 坂内泰子 樋口万喜子	・実習『冬の補習教室』 ・講座後半部の進め方	実習での受講生の役割確認、フィードバック方法・前半部を振り返っての課題を検討
1月26日	かながわ県民センター	長谷川朋美 宮崎幸江 山縣紀子 樋口万喜子	最終回振り返りのまとめ 地域の小学校や大学との連携	・全体の振り返り方法の確認、修了証書の条件、小学校校長先生らへの案内・M小学校見学

3 養成講座の内容について

(1) 養成講座名

外国につながる子どもの日本語支援者養成講座

(2) 養成講座の目標

これまでの教員の経験や知識に、あらたに日本語教育の知識や技術を身につけ、より専門性の高い日本語支援者となり、地域で活動していく人材を養成する。

(3) 受講者の総数 13 人

(4) 開催時間数(回数) 40 時間 (13 回)

(5) 参加対象者の要件

研修受講時に退職している元教員であり、日本語指導のボランティア活動等に意欲がある者。所属していた学校の種別(小・中・高等の別)、年齢、在職年数は問わない

(6) 受講者の募集方法

- ・ 「かながわ多文化子ども支援ML」、「kodomo-ml」、「Yokohamakokusai」などのメーリングリストで受講生を募集。
- ・ 地域のセンターに受講生募集のチラシ(別紙参照)を配布。
- ・ ホームページに募集記事を掲載。

(7) 研修会場

・ かながわ県民センター

〒221-0835 神奈川県横浜市神奈川区鶴屋町2-24-2 電話 045-312-1121(代)

(8) 使用した教材・リソース

『用例付 学習語彙 5000 語』(NPO 中学高校生の日本語支援を考える会編)

『にほんごだいすき』シリーズ1・2 テキスト・ワークブック・教え方ガイド・たんごのほん・れんごのほん 鈴木重幸・工藤真由美・小高愛 むぎ書房

『にほんごをまなぼう』1～3 文部省 ぎょうせい

『日本語学級』1～3 財団法人波多野ファミリースクール 大蔵守久 凡人社

『新しい理科 5 年上』『新しい理科 6 年上』東京書籍

『中学国語 1 年』光村図書

(9) 講座内容

日時	講座名 / 学習内容	講 師	受講者数
10月20日 13:30～15:00	外国につながる子どもの現状と課題	横浜国立大学留学生センター講師 樋口 万喜子	11
10月20日 15:10～16:40	国際社会における異文化理解 ー日本語教育の視点からー	フェリス学院大学講師 清水 基久	
10月27日 13:30～16:40	第二言語としての日本語指導	千葉大学国際教育センター講師 小高 愛	12
11月3日 13:30～16:40	日本社会で生きてきた 外国につながる子どもたちからのメッセージ	当事者(実習協力者)6名 ファシリテーター 樋口 万喜子	11
11月17日 13:30～16:40	外国につながる子どもに係る教育行政	法政大学キャリアデザイン学部教授 山田 泉	12
11月17日 13:30～16:40	南米から来た子どもたちの背景と現状 学校・保護者・支援者をつなぐコミュニケーション	大和市外国人児童生徒教育相談員 日本ペルー共生協会副会長 高橋 悦子	11
12月1日 13:30～16:40	多文化環境に育つ子どもの心の問題・カウンセリング	元上智短大家庭教師ボランティアコー ディネーター 自立支援ホーム職員 有田 琴美	11
12月8日 13:30～16:40	子どものバイリンガリズム	横浜国立大学講師 長谷川 朋美	11
12月15日 13:30～16:40	ボランティアとしてできる支援と工夫	横浜市教育委員会日本語講師 古屋 恵子	13
12月22日 13:30～16:40	年少者対象の日本語教材を考える視点	早稲田大学大学院准教授 池上 摩希子	13
1月5日・6日 10:00～14:00	日本語支援実習『冬の補習教室』 (於: かながわ県民センター)	TIEトマトマの会代表 山縣 紀子	12
1月19日 13:30～16:40	国際教室での支援 ー市立中学校の場合 フィリピンから来た子どもたちの背景と現状	神奈川県立外語短期大学助教 梅田 玲子	11
1月26日 13:30～16:40		メキシコ日本人学校元教員 関口 真理恵	
2月2日 13:30～16:40	海外の教育制度と学校文化 インドシナから来た子どもたちの背景と現状	上智短期大学講師 宮崎 幸江	11
1月26日 13:30～16:40	子どもたちから拓く地域の多文化化	神奈川県立外語短期大学准教授 坂内 泰子	11
2月2日 13:30～16:40	振り返りとまとめ	横浜国立大学留学生センター講師 樋口 万喜子	

(10) 講座の評価

① 受講生に対するアンケート

- ・毎回、講義だけでなく活動があって受講生同士の話し合いが活発に行われたので、経

験の豊富な方の意見が数多く聞くことができて良かった。

- ・退職後の教員の人達が自分の有している能力を発揮して支援していこうとする様子や、その力を取りまとめ活かそうとしている NPO の人たち、そして熱く語る先生方に毎回、鼓舞激励される思いであった。
- ・日本語教授法だけではなく、もっと大きな視点から外国人の子どもの問題を取り上げていたのが新鮮だった。しかし、具体的な教え方のノウハウも、もっと講座で取り上げてほしかった。
- ・ペルーに自宅のある先生、フィリピンについて最近まで住んでいた先生、インドシナ難民の教育問題に大学ぐるみで取り組んでいらっしゃる先生、それぞれ専門を持って、該当生徒の出身国の社会事情や歴史、教育制度等を講義し、実例を写真やビデオで見せてくれたので、現実をつきつけられる刺激的な講座であった。
- ・(『日本社会で生きてきた若者とともに考える』講座では)彼らの自信、しっかりした生き方に接し、喜びと共に感動を覚えた。彼らの話は、今後の活動への大きな指標となった。このような当事者の声を聴く機会は、個人的にはなかなか得られない貴重な経験であった。

② 実施主体からの研修内容結果評価

- ・それぞれの分野で活躍される講師の先生方から多面的に、外国につながる子どもを支援するための専門的な知識や活動方法を受講生に提供することができた。
- ・毎回、グループ活動のアクティビティを入れたので、自然に仲間意識が芽生え、講座修了後にも、共に教材を作成していこうというネットワークができた。
- ・実習に『冬の補習教室』を企画し、県内に広く呼びかけたのは、受講生がさまざまな生徒と出会う機会を作るのに効果的であった。また、入試の教科学習対策だけでなく、模擬面接の実施は、受講生の豊富な教員経験を活かすことができ、入試問題になじみのない受講生にも活躍の場が与えられ、それぞれが充実した時間を持てた。後に、受験生や中学校の国際教室の先生からも感謝のメールが届き、単発ではあったが有意義であったこと、地域と学校との連携の重要性を再確認することとなった。
- ・毎回、講師が異なるため話が重複しないよう、全講師に講座内容を報告していたが、一部、重なりが見られた。講座記録の報告方法などに工夫が必要であった。
- ・外国につながる子どものロールモデルと語り合う第3回の受講生アンケートには、「今後の活動への大きな指標となった」、「彼らの本音の要望は今後の我々の活動の一指針になる」「力づけられた」とあって高い評価を得た。実際に本音で語り合うことにより、受講生、若者たち、講座運営者に新たな発見をもたらす実のある研修となった。

③ 実施主体からの外国人支援体制等今後の計画

- ・「外国人児童生徒学習ボランティア養成講座」(21 年度かながわコミュニティカレッジ委嘱事業)を実施し、慢性的に不足しているボランティアを養成する。
- ・地域のボランティアグループや県内の短期大学と連携して、今後週 2 回の学習支援体制を作っていく。また、冬休みには、受験生にもボランティアにも広く呼びかけて、高校入試対策のための補習教室を開講する。
- ・地域活動センターと連携してボランティアの養成講座を開講し、受講生には講座修了後、そのセンターで活動してもらう。

(11) 事業の成果

① 他事業との連携

- ・受講生を横浜市内の市民活動センターと近隣の外国につながる子どもが 3 割在籍する小学校に学習支援者として紹介できた。
- ・学習支援のボランティアグループ TIE トマトマの会や神奈川県立外語短期大学の教員・学生からなる Team Gaitan Volunteers と連携して補習教室を開講した。
- ・横浜国立大学教育人間科学部日本語教育コースと秦野市教育委員会の後援を受け、ネットワークが生まれた。さらに、横浜国立大学の院生の協力を得、講座を進めると共に、院生にも幅広い知識と実務的な運営方法を学ぶ場が提供できた。

② 研修後の人材活用

- ・当 NPO の「外国につながる中高生の教科学習理解のための教材作成プロジェクト」(21 年度かながわボランタリー基金助成事業)に受講生のほとんどが参加する。
- ・それぞれ地域の日本語ボランティア教室で学習支援を行う。

(12) 今後の課題

- ・年少者の日本語教育は、日本語の上達、学力向上といった短期的目標を掲げると同時に、日本社会が実現せねばならない多文化共生社会の一翼を担う人的リソースを育成するという長期的目標も目指さなければならない。その高い目標を成し遂げるためには、学習環境を整え、効率的な指導をする必要性があり、そのためには【専門性の高い日本語支援者】が生徒に関わっていかなければならない。その【専門性の高い日本語支援者】の養成が急務の課題である。
- ・一方、地域での子どもたちの居場所づくりも重要な課題である。子どもたちの知性や心身が十全な発達を遂げ、「自立した市民」となるため、学びのシステムを整備していかなければならない。志を同じくする団体と連携し、安定した生活環境、学習環境を整えていくことが我々の課題である。